

翔

2013

February

No.220

百万石蝶談会



春季におけるキベリタテハの低地での目撃例

松田俊郎

■その1

2012年4月12日、石川県能美市灯台笹(とだしの)にギフチョウの観察、撮影に訪れた。ここは、拙宅から車なら5分で行ける手軽な撮影地である。灯台笹の集落から山の方へと続く林道で、なかなか止まってくれないギフチョウを追いかけていた時、ふと、林道上を一直線に滑るように飛翔する蝶が目に入った。多分、ルリタテハだろうと思いながら、この蝶を目で追っていると、逆光に前後翅のへりが白く透けて見え、キベリタテハであることに気がついた。見ていると林道の横に下りたので、そっと近づいたが、蝶はこちらの動きに気づいたのか、急に飛び立ち、杉林の中に入り、見失ってしまった。

しかし、まだどこか近くにいるはずだと思い、林道を行ったり来たりしながら探していたところ、林道脇の草地の石に止まって日光浴している本種を見つけ、何とか撮影することができた。時刻は午後12時頃であった。



キベリタテハ 2012年4月12日 能美市灯台笹 松田俊郎

■その2

2012年4月18日、石川県白山市河内町福岡にギフチョウを撮影に行った帰り、天気も良かったので、ひょっとして越冬したタテハチョウが見られるかも知れないと思い、板尾の方に行ってみることにした。通行止めになっている手前で車を止め、林道を歩いて行く。林道が二つに分かれるところから、真っすぐの方の道を少し行ったところで、ふいに飛び立った蝶は、キベリタテハであった。蝶は右手の溪流上をゆっくりと飛翔し、林道横の土手に止まった。そこで、蝶を刺激しないようにゆっくりと近づき、写真に撮ることができた。時刻は、午後12時20分であった。土手の横にはまだ、かなりの雪が残っていた。なお、この後、ほぼ同じ場所でシータテハを目撃、撮影している。

「原色日本蝶類生態図鑑Ⅱ」のキベリタテハの解説には、「9月になって気温が下がる

と、わずかではあるが低標高地に下りてくる個体があり、本州中部地方ではごく稀に、この時期に市街地で発見されることがある。」とある。キベリタテハの発生地は、本州では食樹となるダケカンバ等のある、標高1500メートル前後の亜高山帯であるとされている。県内では8月中旬に白山市白峰の別当出合、白山市尾添の丸石谷で本種を見ているが、こんな低地にまで下りて来る個体がいたことは驚きであった。

本種は成虫で越冬することが知られている。目撃したキベリタテハは、どちらの個体も和名の由来となる黄ベリは白く変色していたが、越冬後の個体は外縁の帯が例外なく白化するようで、これは光によ

る色素の化学変化のようである。目撃状況から見て、昨年の秋に白山の本来の生息地を下って灯台笹近辺、板尾近辺まで到達、越冬したキベリタテハが、春の到来により冬眠から覚め、活動を始めたところにたまたま遭遇したと考えるのが妥当であろう。

《 参考文献 》

福田晴夫ほか(1983)原色日本蝶類生態図鑑(Ⅱ) タテハチョウ・テングチョウ科編。



キベリタテハ 2012年4月18日 白山市河内町板尾 松田俊郎



シータテハ 2012年4月18日 白山市河内町板尾 松田俊郎

2012年に石川県で発生したムラサキツバメ

松井正人

石川県でムラサキツバメの発生が初めて観察された2005年以後、2006年、2009年と発生が観察され、2012年に再び発生が観察されたので報告する。

■羽咋市千里浜

能登有料道路の千里浜インターから県営はまなす団地の横を抜ける道路の両側に、マテバシイがたくさん植えられており、ムラサキツバメは、2005年と2009年に発生が観察されている。

2010年、2011年と石川県で本種は観察されず、2012年はこの場所が第1観察地となり、終齢幼虫多数を観察した。食痕は注意して見ないと分からない程度であり、根際からは生蛹、抜殻ともに発見できなかったのので、この発生がこの場所での第1化と思われた。

2012年9月15日

羽咋市千里浜

ムラサキツバメ10幼(終齢)

松井正人



右下に垂れ下がっているのが幼虫の巣(羽咋市千里浜)



巣を下から覗くと終齢幼虫とアリが見えた(羽咋市千里浜)

■羽咋郡宝達志水町今浜押水運動公園、金沢市金沢競馬場

今浜の押水総合運動公園には、駐車場の周囲からグランドゴルフ広場にかけてマテバシイが植えられているが、今までムラサキツバメは観察されていない。金沢競馬場には、駐車場横の緑地にマテバシイが植えられており、2006年にはムラサキツバメが観察されている。2012年9月15日の調査では、両地においてムラサキツバメは観察できなかった。

■羽咋郡志賀町高浜

志賀町役場周辺から町の中心部を抜けて「はまなす」交差点に至る道路の両側にマテバシイが植えられている。石川県でムラサキツバメの発生が観察される都度、この地でも調査しているが、ムラサキツバメの観察には至っていない。2012年9月17日の調査では、ムラサキツバメが好む新葉がたくさん伸びていたが、今回もムラサキツバメは観察できなかった。

■金沢市袋畠西部緑地公園

犀川と伏見川が合流する場所に石川県によって大きな公園が整備されており、そこかしこにマテバシイが植えられている。2005年には、県内最大の発生地になっていたが、その後の調査では全く観察されていない。2012年10月14日の調査では、ムラサキツバメの幼虫、食痕ともに全く見つからなかった。



10月21日に見つかった終齢幼虫(白山市白山郷運動公園)

■白山市白山郷運動公園

運動公園駐車場の周囲や運動公園に隣接する道路の街路樹にマテバシイが植えられており、県内でムラサキツバメが観察された2005年、2006年、2009年の総ての年に観察されている。2012年の発生も思わせる食痕があちこちで見つかり、調査時期が遅かったにもかかわらず、樹上の葉裏からはアリの背中にまとった終齢幼虫が見つかり、根際の枯葉



10月21日に見つかった生蛹と抜殻(白山市白山郷運動公園)

からは抜殻とともに生蛹が見つかった。

2012年10月21日 白山市白山郷運動公園 ムラサキツバメ 1幼(終齢)1蛹 松井正人

《 参考文献 》

松井正人 (2006) 石川県で発生したムラサキツバメ. 翔 (178) : 3-9.

松井正人 (2007) 2006年石川県のムラサキツバメ. 翔 (184) : 5-9.

松井正人 (2010) 2009年に石川県で発生したムラサキツバメ. 翔 (202) : 1-2.

《まつい まさと 〒921-3121 金沢市大場町東871-15》

2012年度収支報告			
会計年度は1月1日から12月31日			
収 入		支 出	
項 目	金額 (円)	項 目	金額 (円)
2012年度会費	92,000	会誌作成費 (6冊86頁)	178,500
当該年度以外会費	10,000	例会費 (8回実施)	7,454
会誌売上金	25,100	石川県自然史センター会費	3,000
郵送負担金	19,000	郵送費	28,770
寄付金	39,800	消耗品費	1,530
前年度繰越金	14,454	次年度繰越金	0
次年度繰入金	18,900		
計	219,254	計	219,254

年会費は2,000円、郵送負担金は500円

表紙のむし -ミヤマチャバネセセリ-

石川県の海岸沿いには幾つかの記録があり、それを参考に3-4年前から探していたが、ようやくまとまった数を見つけることができた。本種のポイントは後翅の白斑。特に春型は小振りのなのに白斑が大きいので一層カッコいい。 左合直

ハリガネムシ雑感

小幡 英典

■イワナの肛門から飛び出すハリガネムシ

2012年9月26日、瀬波川で釣りあげた尺イワナの肛門からハリガネムシが20cmほど飛び出していた。溪流釣りを始めておおよそ30年。このような事例に遭遇したのはこれが5回目である。過去4例は、直海谷川、大日川水系支流、犀川水系内川支流、浅野川水系支流と場所はバラバラであるが、いずれも9月、イワナで良い型ばかりの印象がある。(溪流釣では魚のサイズを尺貫法で言うことが多く寸=約3cm尺=約30cm。体長が尺を越えていれば尺上、わずかに足りなければ泣き尺といったりする)

溪流釣りを熱心にやっている人に聞くと、釣ったイワナの肛門からハリガネムシが飛び出していた経験を持っている人は少なくなかったが、遭遇することは稀なようだ。

ハリガネムシは、インターネットのウィキペディアによれば

ハリガネムシ(針金虫)とは類線形動物門ハリガネムシ綱(線形虫綱)ハリガネムシ目に属する生物の総称。ミミズや線虫などと違って体に伸縮性がなく、のたうち回るような特徴的な動き方をする。体は左右対称で、種類によっては体長数cmから1mに達し直径は1~3mmと細長い。内部には袋状の体腔がある。表面はクチクラで覆われていて体節はない。カマキリ(主にハラビロカマキリに寄生)やバッタ、ゴキブリ等といった昆虫類の寄生虫として知られている。 ~ 中略 ~

水生生物であるが、生活史の一部を昆虫類に寄生して過ごす。水中に産卵された卵は孵化し、その幼虫は水と一緒に飲み込まれ水生昆虫に寄生する。その宿主である水生昆虫がカマキリなどの陸上生物に捕食されると、その体内で寄生生活をおくり成虫になる。また、寄生された昆虫は生殖機能を失う。成虫になると何らかの方法で宿主から出て、池や沼、流れの緩やかな川などの水中で自由生活し、交尾・産卵を行なう。陸上生物に寄生した場合は水中に脱出する機会に恵まれず陸上でそのまま乾燥してしまうケースも少なくない。乾燥すると外見が錆びた鉄の針金のように硬くなるが、水を浴びたりすると元に戻る。一般的に寄生生物は宿主と運命を共にするがハリガネムシの場合、宿主が上位の生物に捕食される場合も宿主の体外に出ようとすると言われている。カマキリのほかにはカマドウマやバッタにも寄生する。また、昆虫だけではなくイワナなどの魚の内臓に寄生する場合もある。 ~ 後略 ~

引用終わり

寄生したハリガネムシは、成熟すると交尾・産卵のため水中に戻る必要があるため、宿主の昆虫の行動を制御して水辺へ誘導するといわれている。寄生された昆虫の腹部が水に触れると脱出が始まり、脱出している映像は、You Tube等の動画サイトでいくつも見る事が出来る。

引用したウィキペディアの後半（下線部分）に触れられているが、私の周りの釣り人の間では、ハリガネムシは、釣り上げられた魚体の危機を察知して脱出しようとしていると信じられている。釣り上げられてもがく魚の肛門から魚体に絡み付くように蠢くハリガネムシの姿は、まさにそのように見え小生も漠然とそう思っていた。ただこの日（5回目のハリガネムシ脱出に遭遇した日）は、良形のイワナは釣れるものの数が出ず、糸を垂らしながら思索（妄想）する時間が充分あった。（そんな集中力の無い有様だから数が釣れなかったかもしれないのだが）ハリガネムシについて下記のような疑問を抱くようになった。

- * a 昆虫とイワナでは、系統が違い身体の構造も大きく違う、体内に寄生する場合、宿主の免疫機能への対応も必要と思われるが、どちらでもハリガネムシは寄生（成熟）できるのだろうか。
- * b ハリガネムシが、イワナで成熟できるのならば、その方が陸上の昆虫に寄生するよりリスクが低いように思われる。ならば、昆虫に適応したものと溪流魚に適応したもの、それぞれ別種に分化しているのではないか。
- * c イワナの体内で成熟したハリガネムシも交尾・産卵のため水中に脱出する必要があるはずで、たまたまその状況で釣り上げたのではないだろうか。

中でも、ハリガネムシが危険を察知して脱出したのかどうかは気にかかるのだが、釣り上げた結果ハリガネムシが肛門から出てきたのか、ハリガネムシが出ている魚を釣り上げたのか、釣り上げる前の様子がわからないので判断がつかない。

ハリガネムシに寄生されたイワナを飼育して実際に釣り上げてみる等して観察できれば良いのと思うが、そのためのアイデアや資金力を持ち合わせていないので、とりあえずインターネットでそのような事例を集めてみることにした。

■インターネットで事例収集

極めて印象に残る事例なので、ブログ等にアップされているのではないかと考えたのである。方法は、Yahoo japan及びGoogleで「ハリガネムシ イワナ」「ハリガネムシ ヤマメ」「ハリガネムシ 溪流」のワードで検索をかけ、該当する事例の内、確認できる画像があるものだけを選びプリントアウトした後、集計する方法をとった。これは、繰り返しヒットするページが多くあるため、重複して集計するのを避けるためと画像があることで情報の信頼性が高いと考えられること、画像から得られる情報も重要と考えたからである。検索数は、膨大で全てを検証するには数が多すぎるので確認は検索結果の15ページまでとした。試しに20ページ目40ページ目と飛ばして試みたが有用なものは無かった。また、Yahoo japanとGoogleの検索結果に大きな違いは無かった。

その集計結果が表1である。

表1. ハリガネムシ出現表

魚種	イワナ	ヤマメ	アマゴ	ニジマス	サイズ(1寸は約3cm *印は画像からの推測値)	年	月	日	ハリガネムシ出現部位(体長は、標記があったもののみ記載)	肛門	内蔵	口・鰓	都府県	河川
1 ヤマメ		1				2008	3	3	胃 ストマックポンプ エルモンヒラタカゲロウ 幼虫の尾部から露出		1			
2 イワナ	1				9寸*	2007	8	22	内蔵、カマドウマの残骸と		1			湯川
3 ニジマス				1	尺4寸(42cm)	2012	8	22	内蔵		1			
4 イワナ	1				8~9寸*		8	30	肛門	1			群馬県	香妻川本流
5 イワナ	1				3尾	2005	9		胃から		1		山形県	
6 イワナ	1					2006	9		内蔵		1			
7 イワナ	1				8寸*	2008	9		肛門	1				
8 イワナ(画像を見る限りヤマメ)	1					2012	9		内蔵 35cm		1			
9 イワナ	1				9寸強	2011	9	初旬	肛門	1				
10 イワナ	1					2010	9	5	内蔵		1			
11 アマゴ			1		7寸*	2011	9	8	口から鰓にかけて			1		
12 イワナ	1					2009	9	9	肛門	1				庄川
13 イワナ	1				7寸*	2011	9	11	肛門	1				
14 ニジマス				1		2007	9	15	内蔵		1			
15 イワナ	1				9寸*	2008	9	16	内蔵、バッタ目成虫の残骸と		1			
16 イワナ	1				8寸*		9	17	鰓から			1	長野県	
17 ニジマス				1		2005	9	19	鰓から				山形県	大井沢
18 イワナ	1				8寸(23~24cm)	2011	9	20	鰓から			1		
19 イワナ	1				8寸*	2012	9	20	肛門	1				
20 ニジマス				1	8寸*	2010	9	23	肛門	1				
21 イワナ	1				泣き尺	2008	9	26	魚体にまとわりつく	1			長野県	千曲川水系
22 イワナ	1				泣き尺	2008	9	27	肛門	1				
23 イワナ	1				8寸*	2012	9	30	肛門と鰓(別個体)	1		1		
24 イワナ	1				9寸弱	2008	10	12	肛門	1			奈良県	北今西あまご放流釣り場
25 イワナ	1				7寸*		秋		鰓から			1		
26 養殖アマゴ				1	0歳魚	年齢と大きさから秋と推測できる			口から(解剖所見では胃内部で幾重にも重なり肛門まで達していた。約30cm)	1	1	1		
計	19	1	2	4						12	10	7		
	73.1%	3.8%	7.7%	15.4%						46.2%	38.5%	26.9%		

魚体のサイズは、釣り人の良く使う尺貫法で表示(1寸は約3cm) *印は画像からの推測値 局部のアップや内蔵中心の画像等で推測出来ないものは空白

釣り人のホームページ(以下HPと略す)のデータばかりなので、地域や河川(釣場所)を特定できる情報が少ないのはご愛嬌。26例中23例が8月後半から10月の観察で、そのほとんどが9月、魚体サイズから考えると3歳魚以上が多いようだ。(溪流釣りは、一部の管理釣り場を除き、種族保存のため3月から9月が漁期と決められているところが多い。)残り3例の内、2例は、月は不明だが秋の事例で、1例のみ3月だった。

3月の事例は、ストマックポンプでヤマメの胃内容物を調べたところ、水生昆虫の幼虫の尾部からハリガネムシが露出しているものが入っていたもので、ハリガネムシに寄生された水生昆虫の幼虫を溪流魚が摂食していることを示唆している。(このHP管理者は、この幼虫をエルモンヒラタカゲロウと同定している)特筆すべきは、26例中、口や鰓からの脱出が7例有り、内1例は、肛門からも別個体が同時に出ていることだ。

(この集計には含まれていないが、ヤマアカガエルの口からハリガネムシが出ている事例(画像付き)がネット上に1件あった)。

この表を作成したことで下記の疑問が増えた。

- * d 何故、秋にだけハリガネムシが溪流魚から脱出するのか。宿主の危険を察知できるのは秋だけなのか
- * e 肛門以外に口や鰓から出てくるのは何故か。
- * f 釣った魚を食べるために内蔵を取り出した際にその内容物を確認することがあるはずだし、フライフィッシング愛好者は、各河川の溪流魚の食性を知るためにストマッ

クポンプで胃の内容物を通年調べているはずだが、4月から8月前半に内蔵からハリガネムシが見つかった事例がないのは何故か。

dについては、秋になって成熟した個体だけが脱出しているのではと考えることができるが、eとfについては、うまい説明が思いつかなかった。

■ハリガネムシと溪流魚

今回の検索では、2011年4月に京都大学の佐藤拓哉特定助教らが発表した「寄生者（ハリガネムシ類）が駆動する溪畔生態系のエネルギー流の解明」に関するものや、それを引用したHPが多数ヒットした。この研究によれば、ハリガネムシに寄生された陸生昆虫（カマドウマ、キリギリス類）が行動を操作された結果、河川に飛び込むことで溪流魚に餌をもたらし、それが、ある調査地では溪流魚の年間摂餌量の6割にもなるという。また、丹沢大山総合調査学術報告書（2007）では、ヤマメの消化管内容物調査の分析で「秋期にバッタ目の成虫が目立ち、キリギリス科、カマドウマ科の成虫や幼虫が多かった。」と記されており、想像以上にハリガネムシに寄生された昆虫が入水しているようである。

■ハリガネムシの脱出にかかる時間から考える

先にも記したがYou Tubeには、ハラビロカマキリを水につけて寄生しているハリガネムシを脱出させる動画がいくつかアップされている。その動画を見ていて、それなりに時間がかかっていることに気がついた。試しに、その中で画面変更やカット等の編集が行われていないと思われる動画5編を選び、入水から脱出を完了するまでの時間を計測したところ、42秒から60秒で平均すると53秒かかっていた。カマキリとカマドウマでは、寄生しているハリガネムシの属が異なるようだが脱出に要する時間に大差がないと仮定すると、首尾よく宿主をコントロールして入水させても、これだけの時間がかかると脱出完了前に溪流魚に宿主ごと食べられてしまう事故が起きる可能性は低くないと思われる。小生の数少ない毛針釣の経験でも、魚が釣れる時は、毛針の着水から数秒で魚が喰いついてくる。このことから、入水させた昆虫からハリガネムシが脱出する初期の段階で食べられた場合、ハリガネムシは宿主の昆虫ごと丸呑みされて溪流魚の胃袋に収まり、かなり脱出が進んだ状態で捕食された場合は、宿主の昆虫は丸呑みされても宿主から紐のようにぶら下がったハリガネムシまで飲み込みきれず、口や鰓から飛び出した状態になるのではないかという考えに至った。ハリガネムシが寄生するのは昆虫だけでイワナ等の消化管内で見つかるハリガネムシはイワナ等の溪流魚に寄生しているのではなく、宿主の昆虫と共に飲み込まれたハリガネムシで、その後消化管内で死滅すること無く肛門に達し、肛門から脱出していると考えれば、晩夏から秋以外の季節に溪流魚の内蔵からハリガネムシが見つからないことにも説明がつく。ハリガネムシが危険を察知してイワナから脱出していたのではなく、脱出中の状態をたまたま釣り上げただけと考えた方が良さそうである。



素人が試行錯誤しながらネットの情報を集計するだけの横着な方法で上記の考え方にたどり着いたわけで、結論を下すには、検証が足りないとも思うが、ネット上には、宿主と共に飲み込まれたハリガネムシが、口や肛門から脱出する説を見事なイラストで紹介しているHPがある。安斉俊氏の「箱庭動物園日誌」というHPで、管理人の安斉氏は、水生生物の専門家ようだ。また、安斉氏が関わっていると思われる、ハリガネムシ子というTwitterでも同様の説がささやかれていた。実は、このことは専門家の間では既に結論が出ていたことだったのかもしれない。しかし、小生がネットサーフィンした限りに於いて、安斉さんのHP以外は、ウィキペディアと同様の解釈を展開したものばかりであった。

《 参考文献 》

佐藤拓哉、渡辺勝敏 (2011) 「寄生者 (ハリガネムシ類) が駆動する溪畔生態系のエネルギー流の解明」. Ecology 92:201-207.

勝呂尚之、石綿進一、齋藤和久 (2007) 東西モニタリング・エリアの魚類相. 丹沢大山総合調査学術報告書 (2007) : 280-292.

安斉 俊 (2012.12閲覧) 箱庭動物園日誌 (オンライン) <http://hakofoo.blog94.fc2.com/blog-date-201012.html>.

《おばた ひでのり 〒923-0825 小松市西軽海4-174》

会員の動き・しゃばの動き

■能登島でウラナミアカシジミ

長らく津幡以南に生息していると思われるウラナミアカ、2001年の宝達山を皮切りに、ポツリポツリと能登で見付かり4カ所目。これまで調査されていなかったように思われ、この先どこまで見つかるか期待したい。

■海岸アサギと戻りアサギがほぼ同数

初夏の海岸で、北上するアサギが観察でき、去年は約1000頭が捕獲された。てっきり多い年と思い込んだが、秋に南下する戻りアサギはさっぱりで、白山周辺、宝達山ともに500頭程だった。海岸アサギのマーキング活動は年々盛んに成り、戻りアサギのそれと競るようになってきた。

■ポカポカ天气に誘われて真冬の虫探し

一月ぶりのお天气に、トゲナナフシの観察に出かける。一度雪が積もったので心配していたが、3♀を発見。前肢を触角に沿わせて前に突き出すお馴染みのポーズで、水路の壁に張り付いていた。この時期にこれだけ大きな虫が見つかる、うれしくなる。

■訃報

「辰口町のウスバシロチョウ」や「キベリタテハとツマグロヒョウモンの絡み合い」など自転車を駆って活動されていた牧原悟郎氏、「我が家の庭のツマグロヒョウモン」シリーズでおなじみの奥素八子氏、御両氏は長期に渡り蝶談会で活躍されていましたが、昨年ご逝去のお知らせをいただきました。皆さんにお知らせするとともに謹んでご冥福をお祈りします。

■準備運動の勧め

急に走り出したり、無理な姿勢でネットを振ったりと、虫屋の動きは体への負担が大きい。「痛〜」で済んだり、2〜3日尾を引く程度で済めば良いが、元に戻らない事もあり、半月板断裂とか、上腕二頭筋腱切断とか、後悔の言葉が聞こえてくる。若い頃は何でもないことが、齢を重ねた体には相当な負担となるので、後悔しないためにも準備運動をお勧めする。

■アカエゾゼミはいつ鳴くか

2011年は大当たりの年で、それこそいつでも鳴いていた。2012年は外れ年で、エゾゼミ3種の声は、ほとんど聞こえなかったが、こんな年こそ良く鳴く時期や時間が分かるというもの。瀬女高原で7月21日〜9月2日にかけて毎日録音調査をしたところ、アカエゾが一番鳴いた日は7月30日、一番鳴いた時間は10時〜11時だった。

■ポプラ社のポプラディア大図鑑

日本産のチョウとクワガタが全種掲載され、さらに日本で見られる虫の仲間を加え約1800種が美しいカラー図版で紹介されている。身近な虫は網羅されており、ナゲナワグモやカニムシまで載っていて、2000円なのが嬉しい。A4版251ページ1.5kg。

■ウラギンシジミは見つかるか

ツバキやサザンカの葉裏でじっと耐えて冬を越すウラギンシジミ。1992年刊の石川の自然「昆虫」には、この健気な写真が載っている。この姿を肉眼でも見たくて探しているが、なかなか見つからない。

■全国で再発見されているカエルキンバエ

1960年代までは河北潟から金沢市大野にかけて普通に見られたカエルキンバエだったが、その後の記録は全国的に途絶えていた。本種の国内第1発見者は金沢大学の堀博士で縁が深いことから、徳本氏は見分け方や生息環境、発生時期などの解説書を、2000年に「はなあぶ」に投稿したところ、今では各地で再発見が相次いでいる。

■身近に居た筈の虫が

金沢の低山には竹林が多く、かつては春にギフチョウが舞う明るく歩き易い場所だった。近年は放置され、竹が密生しすぎて中にも入れない状態で、隣の畑や雑木林に広がっている。どう見たって虫がいそうじゃない。こんなのが広がると、身近に居た虫達が遠ざかって行くような気がする。

■虫採り、虫撮り、虫録り

「撮っていると採れない」と、長く採り一筋だったが、持ち運びが簡単なカメラの登場で虫撮りに手を出した。目のピントが合わなくなるに従って虫採りが減り、オートピントの虫撮りが増えた。最近では鳴き声の虫録りにも励んでいるが、手軽な良い器材

がどんどん出てきて楽しみが増えている。

■ 例 会 の 記 録 ■

12月7日(木) 浅地メッキ2階にて、午後8時から開催。

今回は、大宮氏が面白い実験結果を紹介。ヨツバヒヨドリの根をコップ一杯の水と一緒にミキサーにかけ、一晩寝かせてから漉す。この水溶液をスプレーすると、スプレーしたものにスジグロカバマダラが集まってきた。時間が経つとスプレーは乾いてしまいが、スジカバは集合したままで飛び去らなかった。根には、誘引物質のピロリジジンアルカロイドが含まれており、揮発しないので水分が乾いても効果は持続するらしい。

その他の話題は、能登島のウラナミアカ、卯辰山のオオムラサキ、今年も採れたナガサキアゲハ、中宮温泉でヒメシジミ、大和堆で採れたガムシ、白山湯ノ谷昆虫相調査、スラウエシの昆虫、河北潟レッドデータブック、有志で泊まった岩間温泉、など。

参加は、富沢、井村、吉村、大宮、勝海、松井、松田、浅地、竹谷、浅野、福富の11人。

■ ■ 表紙デザイン：小幡英典 ■ ■

目 次

松田俊郎：春季におけるキベリタテハの低地での目撃例	1
松井正人：2012年に石川県で発生したムラサキツバメ	3
小幡英典：ハリガネムシ雑感	6
編集部：会員の動き・しゃばの動き	11

翔 220号

Tobu 2013年2月10日発行
百万石蝶談会
金沢市大場町東871-15 松井方

<http://homepage3.nifty.com/100man/>

☎920-3121 ☎076-258-2727
郵便振替 00750-8-562
印刷 小西紙店印刷所

